

夏目漱石

倫敦塔



倫^ロ_ン

敦^ド_ン

塔

二年の留学中ただ只一度ロンドンとう倫敦塔を見物した事がある。その後再び行こうと思つた日もあるが止やめにした。人から誘われた事もあるが断つた。一度で得た記憶を二返目へんめに打壊ぶちこわすのは惜い、三たび目に拭い去るのは尤もつとも残念だ。「塔」の見物は一度に限ると思う。

行つたのは着後間もないうちの事である。その頃は方角もよく分らんし、地理などは固もとより知らん。まるで御ごてんば殿場の兎が急に日本橋の真中まんなかへ抛ほうり出された様な心持

ちであつた。表へ出れば人の波にさらわれるかと思ひ、家に帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。この響き、この群集の中に二年住んでいたら吾が神経の纖維も遂には鍋の中の麩海苔の如くべとべとになるだろうとマクス・ノルダウの退化論を今更の如く大真理と思ふ折さえあつた。

しかも余は他の日本人の如く紹介状を持って世話になりに行く宛もなく、又在留の旧知とては無論ない身の上であるから、恐々ながら一枚の地図を案内として毎日見物の為め若くは用達の為め出あるかねばならなかつた。

無論汽車へは乗らない、馬車へも乗れない、滅多な交通機関を利用仕ようとすると、どこへ連れて行かれるか分らない。この広い倫敦を蜘蛛手十字に往来する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道も余には何等の便宜をも与える事が出来なかつた。余は已^{やむ}を得ないから四ツ角へ出る度^{たび}に地図を披^{ひら}いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地図で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡查を探す、巡查でゆかぬ時は又外の人に尋ねる、何人でも合点^{がてん}の行く人に出逢うまでは捕えては聞き呼び掛ては聞く。かくして漸^{ようや}くわが指定の地に至るのであ

る。

「塔」を見物したのはあたかもこの方法に依らねば外出の出来ぬ時代の事と思う。来るきたにらいしよ来所なく去るきよしよに去所を知らずと云うと禅語めくが、余はどの路を通つて「塔」に着したか又如何いかなる町を横ぎつて吾家に帰つたか未だいまに判然しない。どう考えても思い出せぬ。只「塔」を見物しただけは慥たしかである。「塔」その物の光景は今でもありありと眼に浮べる事が出来る。前はと問われると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が会釈もなく明るい。あたかも闇やみを裂く稲妻

の眉おつに落ると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世すくせの夢の焼点しょうてんの様だ。

倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎せんじ詰めたものである。過去と云う怪しき物を蔽おおえる戸帳とばりが自おのずと裂けて龕中がんちゆうの幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。凡すべてを葬る時の流れが逆さかしまに返って古代の一片が現代に漂い来れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である。

この倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てて眼の前

に望んだとき、余は今の人が將^はた古^{いにし}えの人かと思うま
で我を忘れて余念もなく眺め入った。冬の初めとはいい
ながら物静かな日である。空は灰汁桶^{あくおけ}を掻^かき交ぜた様な
色をして低く塔の上に垂れ懸っている。壁土を溶し込ん
だ様に見ゆるテームスの流れは波も立てず音もせず無理
矢理に動いているかと思わるる。帆懸舟^{ほかけぶね}が一隻^{せき}塔の下を
行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形
の白き翼がいつまでも同じ所^{とま}に停^{とま}っている様である。
伝馬^{てんま}の大きいのが二艘^{そうのぼ}上^{のぼ}って来る。只一人の船頭^{とこ}が艫^{とこ}に
立^たって艫^ろを漕^こぐ、これも殆^{ほと}んど動かない。塔橋の欄干の

あたりには白き影がちらちらする、大方鷗かもめであろう。見渡したところ凡すべての物が静かである、物憂げに見える、眠っている、皆過去の感じである。そうしてその中に冷然と二十世紀を輕蔑けいべつする様に立っているのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟いやしくも歴史の有あらん限りは我のみは斯かくてあるべしと云わぬばかりに立っている。その偉大なるには今更の様に驚かれた。この建築を俗に塔と称えているが塔と云うは単に名前のみで実は幾多の櫓やぐらから成り立つ大きな地域じしろである。並び聳そびゆる櫓には丸きもの角張りたるもの色々の形状はあるが、何いずれも陰

気な灰色をして前世紀の紀念を永劫えいごうに伝えんと誓える如く見える。九段くだんの遊就館を石で造つて二三十並べてそうしてそれを虫眼鏡で覗のぞいたら或あるいはこの「塔」に似たものは出来上りはしまいかと考えた。余はまだ眺めている。セピヤ色の水分もつを以て飽和したる空気の中にぼんやり立って眺めている。二十世紀の倫敦がわが心の裏うらから次第に消え去ると同時に眼前の塔影が幻まぼろしの如き過去の歴史を吾が脳裏に描き出してくる。朝起きて啜すする渋茶に立つ烟けむりの寐足ねたらぬ夢の尾を曳ひく様に感ぜらるる。暫しばくすと向う岸から長い手を出して余を引張るかど怪しまれ

て来た。今まで佇立ちよりつして身動きもしなかつた余は急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手は猶々なおなお強く余を引く。余は忽たちまち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい牽ひく。塔橋を渡つてからは一目散に塔門まで馳はせ着けた。見る間に三万坪に余る過去の一大磁石は現世げんせに浮游ふゆうするこの小鉄屑てつくずを吸収おわし了つた。門を入れて振り返つたとき、

憂うれいの国に行かんとするものはこの門を潜くぐれ。

永劫の呵責かしゃくに遭あわんとするものはこの門をくぐれ。

迷惑の人と伍せんとするものはこの門をくぐれ。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初
愛は、われを作る。

我が前に物なし只無窮あり我は無窮に忍ぶものな
り。

この門を過ぎんとするものは一切の望のぞみを捨てよ。
という句がどこぞきよに刻んではないかと思つた。余はこの
時既に常態を失っている。

からほり空濠にかけてある石橋を渡つて行くと向うに一つの塔
がある。これは丸形の石造で石油せきゆうタンクせきゆうの状をなしてあ
たかも巨人の門柱の如く左右に屹立きつりつしている。その中間

を連ねている建物の下を潜くぐつて向むかへ抜ける。中塔とは
 この事である。少し行くと左手に鐘塔が峙そばだつ。真鉄の盾たて、
 黒鉄くろがねの甲かぶとが野を蔽おおう秋の陽炎かげろうの如く見えて敵遠くより
 寄すると知れば塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁上を歩
 む哨兵しょうへいの隙すきを見て、逃れ出いずる囚人しゅうじんの、逆さかしまに落す
たいまつ松明の影より闇に消ゆるときも塔上の鐘を鳴らす。心傲おごこ
 れる市民の、君の政まつりごと非なりとて蟻ありの如く塔下に押し
 寄せて犇ひしめき騒ぐときもまた塔上の鐘を鳴らす。塔上の
 鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二むにに鳴らし、ある
 時は無三むさんに鳴らす。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、仏ぶつ

来る時は仏を殺しても鳴らした。霜の朝あした、雪の夕ゆうべ、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は今いずこへ行つたものやら、余が頭こうべをあげて蔦つたに古ふるりたる櫓を見上げたときは寂然せきぜんとして既に百年の響を収めている。

又少し行くと右手に逆賊門がある。門の上には聖セントタマス塔が聳そびえている。逆賊門とは名前からが既に恐ろしい。古来から塔中に生きながら葬られたる幾千の罪人は皆舟からこの門まで護送されたのである。彼等が舟を捨てて一度びこの門を通過するや否や娑婆しやばの太陽は再び彼等を照さなかつた。テームスは彼等にとっての三途さんずの川

でこの門は冥府よみに通ずる入口であつた。彼等は涙の浪に
 揺られてこの洞窟どうくつの如く薄暗きアーチの下まで漕ぎ付け
 られる。口を開けて鰓いわしを吸う鯨くじらの待ち構えている所ま
 で来るや否やキーと軋きしる音と共に厚樫あつがしの扉は彼等と浮世
 の光りとを長えとこしに隔てる。彼等にかくして遂に宿命の
 鬼の餌食えじきとなる。明日あす食われるか明後日あさって食われるか或は
 又十年の後に食われるか鬼より外に知るものはない。こ
 の門に横付につく舟の中に坐している罪人の途中の心は
 どんなであつたらう。權かゐがしわる時、雫しずくが舟縁ふなべりに滴したた
 る時、漕ぐ人の手の動く時毎ごとに吾が命を刻まるる様に思

ったであろう。白き髯ひげを胸まで垂れて寛ゆるやかに黒ほうえの法衣ほうえを纏まとえる人がよろめきながら舟から上る。これは大僧正
 クランマーである。青き頭巾ずきんを眉深まぶかに被かぶり空色の絹の下
 に鎖り帷子かたびらをつけた立派な男はワイアットであろう。こ
 れは会釈もなくふなべり舷ふなべりから飛び上る。はなやかな鳥の毛を
 帽さに挿さして黄金こがね作りの太刀たちの柄つかに左の手を懸かけ、銀の留
 め金つまさきにて飾れる靴の爪先つまさきを、軽かろげに石段の上に移すのは
 ローリーか。余は暗きアーチの下を覗のぞいて、向う側には
 石段を洗う波の光の見えはせぬかと首を延のばした。水は
 ない。逆賊門とテームス河とは堤防工事の竣しゅん功こう以来全

く縁がなくなつた。幾多の罪人を呑み、幾多の護送船を吐き出した逆賊門は昔しの名残りにその裾すそを洗う笹波ささなみの音を聞く便りを失つた。只向う側に存する血塔の壁上に大なる鉄環おほが下がっているのみだ。昔しは舟の纜ともづなをこの環つなに繋いだという。

左りへ折れて血塔の門に入るはい。今は昔し薔薇しょうびの乱に目に余る多くの人を幽閉したのはこの塔である。草の如く人を薙なぎ、鶏の如く人を潰つぶし、乾鮭からさけの如く屍しかばねを積んだのはこの塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番の様な箱があつて、その側かたわらに甲形かぶとがた

の帽子をつけた兵隊が銃を突いて立っている。頗るすこぶ
 真面目まじめな顔をしているが、早く当番を済まして、例の酒舗しゅぽ
 で一杯傾けて、一件にからかつて遊びたいという人相で
 ある。塔の壁は不規則な石を畳み上げて厚く造つてある
 から表面は決して滑なめらかではない。所々に蔦つたがからんでい
 る。高い所に窓が見える、建物の大きい所せ為か下から見
 ると甚はなはだ小ちいさい。鉄の格子こうしがはまっているようだ。番兵
 が石像の如く突立ちながら腹の中で情婦と巫山ふざけ戯ている
 傍かたわらに、余は眉を攢め手をかざしてこの高窓を見上げ
 て佇たたずむ。格子を洩もれて古代の色硝子いろガラスに微かすかなる日影が

さし込んできらきらと反射する。やがて烟けむりの如き幕が開あいて空想の舞台がありありと見える。窓の内側は厚き戸帳とばりが垂れて昼もほの暗い。窓に対する壁は漆喰しっくいも塗らぬ丸裸の石で隣りの室とは世界滅却の日に至るまで動かぬ仕切りが設けられている。只その真中の六畳ばかりの場所は冴さえぬ色のタペストリで蔽かわれている。地は納戸色なんどいろ、模様は薄き黄で、裸体の女神めがみの像と、像の周圍に一面に染め抜いた唐草からくさである。石壁の横には、大きな寝台ねだいが横よこたわる。厚樫あつがしの心も透れと深く刻みつけたる葡萄ぶどうと、葡萄の蔓と葡萄の葉が手足の触るる場所だけ光りを

射返す。この寝台の端はじに二人の小児しょうにが見えて来た。一人は十三四、一人は十歳位とうぐらいと思われる。幼なき方は床に腰をかけて、寝台の柱に半ば身を倚もたせ、力なき両足をぶらりと下げている。右の肱ひじを、傾けたる顔と共に前に出して年嵩としかさなる人の肩に懸ける。年上なるは幼なき人の膝ひざの上に金にて飾れる大きな書物を開げて、そのあけてある頁の上に右の手を置く。象牙ぞうげを揉もんで柔かにしたる如く美しい手である。二人とも鳥からすの翼を欺く程の黒き上衣うわぎを着ているが色が極きわめて白いので一段と目立つ。髪の色、眼の色、さては眉根鼻付から衣装の末に至るまで両人共ふたり

殆んど同じ様に見えるのは兄弟だからであろう。

兄が優しく清らかな声で膝の上なる書物を読む。

「我が眼の前に、わが死ぬべき折の様を想い見る人こそ幸さちあれ。日毎夜毎に死なんと願え。やが

ては神の前に行くなる吾の何を恐るる……」

弟は世に憐あわれなる声にて「アーメン」と云う。折から遠くより吹く木枯しの高き塔を撼ゆるがして一度びは壁も落つるばかりにゴーと鳴る。弟はひたと身を寄せて兄の肩に顔をすり付ける。雪の如く白い蒲団ふとんの一部がほかと膨ふくれ返る。兄は又読み初める。

「朝ならば夜の前に死ぬと思え。夜ならば翌日^{あす}ありと頼むな。覚悟をこそ尊べ。見苦しき死に様ぞ耻^{はじ}の極みなる……」

弟又「アーメン」と云う。その声は顫^{ふる}えている。兄は静かに書をふせて、かの小さき窓^{かた}の方へ歩みよりて外の面^もを見ようとする。窓が高くて脊^せが足りぬ。床几^{しょうぎ}を持って来てその上につまだつ。百里をつつむ黒霧の奥にぼんやりと冬の日が写る。屠^{ほふ}れる犬の生血にて染め抜いた様である。兄は「今日もまたこうして暮れるのか」と弟を顧みる。弟は只「寒い」と答える。「命さえ助けてくるる

なら伯父おじ様に王の位を進ひとぜるものを」と兄が独り言の様につぶやく。弟は「母ははさま様に逢いたい」とのみ云う。この時向うに掛っているタペストリに織り出してある女神の裸体像が風もないのに二三度ふわりふわりと動く。

忽然こっぜん舞台が廻る。見ると塔門の前に一人の女が黒い喪服を着て悄然しょうぜんとして立っている。面影は青白く窶やつれてはいるが、どことなく品格のよい気高い婦人である。やがて錠のきしる音がしてぎいと扉が開くと内から一人の男が出て来て恭うやうやしく婦人の前に礼をする。

「逢う事を許されてか」と女が問う。

「否」と気の毒そうに男が答える。「逢わせまつらんと
 思えど、公けの掟おきてなれば是非なしと諦あきらめ給え。私の情なさけ
 売るは安き間の事まにてあれど」と急に口を緘つぐみてあたり
 を見渡す。濠ほりの内からかいつぶりがひよいと浮き上る。

女は頸うなじに懸けたる金の鎖を解いて男に与えて「只束つか
 の間まを垣間見かいまんと願なり。女人にょにんの頼み引き受けぬ君は
 つれなし」と云う。

男は鎖りを指の先に巻きつけて思案の体ていである。かい
 つぶりはふいと沈む。ややありていう「牢守りは牢の掟
 を破りがたし。御子みこ等は変る事なく、すこやかに月日を

過させ給う。心安く覺おぼして帰り給え」と金の鎖りを押戻す。女は身動きもせぬ。鎖ばかりは敷石の上に落ちて鏘然そうぜんと鳴る。

「如何いかにしても逢う事は叶かなわずや」と女が尋ねる。

「御氣の毒なれど」と牢守が云い放つ。

「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云いながら女はさめざめと泣く。

舞台が又変る。

丈たけの高い黒装束の影が一つ中庭の隅すみにあらわれる。苔こけ寒き石壁の中からスーと抜け出た様に思われた。夜と霧

との境に立って朦朧もうろうとあたりを見廻す。暫くすると同じ黒装束の影が又一つ陰の底から湧わいて出る。櫓の角に高くかかる星影を仰いで「日は暮れた」と脊せの高いのが云う。「昼の世界に顔は出せぬ」と一人が答える。「人殺しも多くしたが今日程寐覚ねぎめの悪い事はまたとあるまい」と高き影が低い方を向く。「タペストリの裏で二人の話しを立ち聞きした時は、いつその事止めて帰ろうかと思うた」と低いのが正直に云う。

「絞しめる時、花の様な唇くちびるがぴりぴりと顫ふるうた」
「透き通る様な額に紫色の筋が出た」 「あの唸うなった声

がまだ耳に付いている」。黒い影が再び黒い夜の中に吸い込まれる時檣の上で時計の音があんと鳴る。

空想は時計の音と共に破れる。石像の如く立っていた番兵は銃を肩にしてコトリコトリと敷石の上を歩いている。あるきながら一件と手を組んで散歩する時を夢みている。

血塔の下を抜けて向^{むか}へ出ると奇麗な広場がある。その真中が少し高い。その高い所に白塔がある。白塔は塔中の尤も古きもので昔しの天主である。豎^{たて}二十間、横^{すみやぐら}十八間、高さ十五間、壁の厚さ一丈五尺、四方に角^{すみやぐら}楼が

聳えて所々にはノーマン時代の銃眼さえ見える。千三百九十九年国民が三十三カ条の非を挙げてリチャード二世に讓位をせまったのはこの塔中である。僧侶そうりよ、貴族、武士、法士の前に立って彼が天下に向って讓位を宣告したのはこの塔中である。爾時その讓りを受けたるヘンリーは起って十字を額と胸に画して云う「父と子と聖靈の名によつて、我れヘンリーはこの大英国の王冠と御代みよとを、わが正しき血、恵みある神、親愛なる友の援たすけを藉かりて襲つぎ受く」と。さて先王の運命は何人なんびとも知る者がなかつた。その死骸しがいがポント・フラクト城より移されて聖セントポール

寺に着した時、二万の群集は彼の屍しかばねを繞めぐつてその骨立こつりつせる面影に驚かされた。或は云う、八人の刺客せつかくがリチャードを取り卷いた時彼は一人の手より斧おのを奪いて一人を斬きり二人を倒した。されどもエクストンが背後より下せる一撃の為めに遂に恨うらみを呑んで死なれたと。或る者は天を仰いで云う「あらずあらず。リチャードは断食をして自みづからと、命の根をたたれたのじや」と。何れにしても難ありがた有くない。帝王の歴史は悲惨の歴史である。

階下の一室は昔しウォルター・ロリーが幽囚の際万国史の草そうを記しるした所だと云い伝えられている。彼がエリザ

式の半ズボンに絹の靴下を膝頭ひざがしらで結んだ右足を左りの上へ乗せて驚がペンの先を紙の上へ突いたまま首を少し傾けて考えている所を想像してみた。然しかしその部屋は見る事が出来なかつた。

南側から入って螺旋状らせんじょうの階段を上るとここに有名な武器陳列場がある。時々手を入れるものと見えて皆びかびか光っている。日本に居ったとき歴史や小説で御目にかかただけで一向要領を得なかつたものが一々明めいりよう瞭りょうになるのは甚はなはだ嬉しい。然し嬉しいのは一時の事で今ではまるで忘れてしまったからやはり同じ事だ。只猶なお記憶に

残っているのが甲冑かっちゆうである。その中でも実に立派だと思つたのは慥たしかヘンリー六世の着用したものと覚えていゝる。全体が鋼鉄製で所々に象嵌ぞうがんがある。尤も驚くのはその偉大な事である。かかる甲冑を着けたものは少なくとも身の丈七尺位の大男でなくてはならぬ。余が感服してこの甲冑を眺めているとコトリコトリと足音がして余の傍そばへ歩いて来るものがある。振り向いてみるとビーフ・イーターである。ビーフ・イーターと云うと始終ぎゆう牛でも食っている人の様に思われるがそんなものではない。彼は倫敦塔の番人である。絹帽シルクハットを潰つぶした様な帽子を被

つて美術学校の生徒のような服を纏うている。太い袖の先を括くくつて腰の所を帯でしめている。服にも模様がある。模様は蝦夷人えぞの着る半纏はんてんについている様な頗すこぶる単純の直線を並べて角形に組み合わせたものに過ぎぬ。彼は時として槍やりをさえ携える事がある。穂の短かい柄の先に毛の下がった三国志にでも出そうな槍をもつ。そのビーフ・イーターの一人が余の後ろに止まった。彼はあまり脊の高くない、肥り肉じしの白髯しらひげの多いビーフ・イーターであつた。「あなたは日本人では有りませんか」と微笑しながら尋ねる。余は現今の英国人と話をしていている気がし

ない。彼が三四百年の昔から一寸ちよつと顔を出したか又は余が急に三四百年の古いにしえを覗のぞいた様な感じがする。余は黙して軽かろくうなずく。こちらへ来給えと云うから尾ついて行く。彼は指を以て日本製の古き具足を指して、見たかと言わぬばかりの眼付をする。余は又だまってうなずく。これは蒙古もうこよりチャーレス二世に献上になったものだとビーフ・イーターが説明をしてくれる。余は三たびうなずく。

白塔を出てボーシヤン塔に行く。途中に分捕ぶんどりの大砲が並べてある。その前の所が少しばかり鉄柵てつさくで囲い込んで、

鎖の一部に札が下がっている。見ると仕置場の跡とある。二年も三年も長いのは十年も日の通わぬ地下の暗室に押し込められたものが、或る日突然地上に引き出さるるかと思うと地下よりも猶恐しきこの場所へ只据えらるる為めであつた。久しぶりに青天を見て、やれ嬉しやと思う間もなく、目がくらんで物の色さえ定かには眸ぼうちゆう中に写らぬ先に、白き斧の刃がひらりと三尺の空くうを切る。流れる血は生きているうちから既に冷めたかつたであろう。鳥が一疋びき下りている。翼をすくめて黒い嘴くちばしをとがらせて人を見る。百年碧血へきけつの恨うらみが凝こつて化鳥けちようの姿となつて

長くこの不吉な地を守る様な心地がする。吹く風に楡にれの木がざわざわと動く。見ると枝の上にも鳥が居る。暫くすると又一羽飛んでくる。何処どこから来たか分らぬ。傍に七つばかりの男の子を連れた若い女が立って鳥を眺めている。希臘ギリシヤ風の鼻と、珠を溶いた様にうるわしい目と、真白な頸筋くびすじを形づくる曲線のうねりとが少からず余の心を動かした。小供は女を見上げて「鴉からすが、鴉が」と珍らしそうに云う。それから「鴉が寒むそうだから、麵パン麩なをやりたい」とねだる。女は静かに「あの鴉は何なんにもたべたがっついていやしません」と云う。小供は「なぜ」と聞

く。女は長い睫まつげの奥に漾ただようている様な眼で鴉を見詰めながら「あの鴉は五羽居ます」といったぎり小供の問には答えない。何か独りで考えているかと思わるる位澄している。余はこの女とこの鴉の間に何か不思議の因縁でもありはせぬかと疑った。彼は鴉の気分をわが事の如くに云い、三羽しか見えぬ鴉を五羽居ると断言する。あやしき女を見捨てて余は独りボーシヤン塔に入る。

倫敦塔の歴史はボーシヤン塔の歴史であつて、ボーシヤン塔の歴史は悲酸の歴史である。十四世紀の後半にエドワード三世の建立こんりゆうにかかるこの三層塔の一階室に入

るものはその入るの瞬間に於て、百代の遺恨を結晶した
 る無数の紀念を周囲の壁上に認むるのである。凡ての
 怨、凡ての憤、凡ての憂と悲みとはこの怨、この憤、
 この憂と悲の極端より生ずる慰藉と共に九十一種の題辭
 となつて今に猶觀る者の心を寒からしめている。冷やか
 なる鉄筆に無情の壁を彫つてわが不運と定業とを天地
 の間に刻み付けたる人は、過去という底なし穴に葬られ
 て、空しき文字のみいつまでも娑婆の光りを見る。彼等
 は強いて自らを愚弄するにあらずやと怪しまれる。世に
 反語というがある。白というて黒を意味し、小と唱えて

大を思わしむ。凡ての反語のうち自ら知らずして後世に残す反語程猛烈なるはまたと有あるまい。墓碣ぼけつと云い、紀念碑きねんと云い、賞牌しょうはいと云い、綬章じゆうしょうと云いこれ等が存在する限りは、空しき物質に、ありし世を偲しのばしむるの具となるに過ぎない。われは去る、われを伝うるものは残ると思うは、去るわれを傷いたましむる媒介物の残る意にて、われその者の残る意にあらざるを忘れたる人の言葉と思う。未来の世まで反語を伝えて泡沫ほうまつの身を嘲あざける人のなす事と思う。余は死ぬ時に辞世も作るまい。死んだ後は墓碑も建ててもらうまい。肉は焼き骨は粉こにして西風の

強く吹く日大空に向つて撒き散らしてもらおうなどとい
らざる取越苦勞をする。

題辞の書体は固より一様でない。あるものは閑ひまに任せ
て叮嚀ていねいな楷書かいしょを用い、あるものは心急ぎてか口惜くやし紛れ
かがりがりと壁を搔なぐいて擲なぐり書きに彫り付けてある。又
あるものは自家の紋章を刻み込んでその中に古雅な文字もんじ
をとどめ、或は盾の形を描いてその内部に読み難き句を
残している。書体の異なる様に言語もまた決して一様で
ない。英語は勿論もちろんの事、以太利語イタリーも羅甸語ラテンもある。左り
側に「我が望は基督キリストにあり」と刻されたのはパスリュと

いう坊様の句だ。このパスリュは千五百三十七年に首を斬られた。その傍かたわらに JOHAN DECKER と云う署名がある。デッカーとは何者だか分らない。階段を上って行くのと戸の入口に T.C. というのがある。これも頭文字だけで誰やら見当がつかぬ。それから少し離れて大變綿密なのがある。先ず右の端はじに十字架を描いて心臓を飾り付け、その脇に骸骨がいこつと紋章を彫り込んでいる。少し行くと盾の中に下の様な句をかき入れたのが目につく。「運命は空しく我をして心なき風に訴えしむ。時も摧くだけよ。わが星は悲かれ、われにつれなかれ」。次には「凡ての人

を尊べ。衆生しゅじょうをいつくしめ。神を恐れよ。王を敬え」とある。

こんなものを書く人の心の中はどの様であつたらうと想像してみる。凡およそ世の中に何が苦しいと云つて所在のない程の苦しみはない。意識の内容に变化のない程の苦しみはない。使える身体からだは目に見えぬ縄なわで縛られて動きのとれぬ程の苦しみはない。生きるというは活動おさしてゐるといふ事であるに、生きながらこの活動を抑おさえらるるのとは生という意味を奪われたると同じ事で、その奪われたを自覚するだけが死よりも一層の苦痛である。この壁

の周囲をかくまでに塗抹とまつした人々は皆この死よりも辛い苦痛を嘗なめたのである。忍ばるる限り堪たえらるる限りはこの苦痛と戦たたった末、居ても起たつてもたまらなく為なった時、始めて釘くぎの折や鋭どき爪を利用して無事の内に仕事を求め、太平の裏うちに不平を洩し、平地の上に波瀾はらんを画いたものである。彼等が題せる一字二画は、号泣、涕淚ていらい、その他凡て自然の許す限りの排悶はいもん的手段を尽したる後猶飽く事を知らざる本能の要求に余儀なくせられたる結果であろう。

又想像してみる。生れて来た以上は、生きねばならぬ。

敢^{あえ}て死を怖るるとは云わず、只生きねばならぬ。生きねばならぬと云うは耶蘇^{ヤソ}孔子以前の道で、又耶蘇孔子以後の道である。何の理窟^{りくつ}もいらぬ、只生きたいから生きねばならぬのである。凡ての人は生きねばならぬ。この獄に繋^{つな}がれたる人もまたこの大道に従って生きねばならなかつた。同時に彼等は死ぬべき運命を眼前に控えておつた。如何^{いか}にせば生き延びらるるだろうかとは時々刻々彼等の胸裏に起る疑問であつた。一度びこの室^{へや}に入るものは必ず死ぬ。生きて天日^{てんじつ}を再び見たものは千人に一人しかない。彼等は遅かれ早かれ死なねばならぬ。されど古

今にわたる大真理は彼等に誨おしえて生きよと云う、飽くま
 でも生きよと云う。彼等は已やむを得ず彼等の爪を磨といだ。尖と
 がれる爪の先を以て堅き壁の上に一と書いた。一をかけ
 る後も真理は古いにしえの如く生きよと囁ささやく、飽くまでも生
 きよと囁く。彼等は剥はがれたる爪の癒ゆるを待つて再び
 二とかいた。斧の刃に肉飛び骨摧くだける明日あすを予期した彼
 等は冷やかなる壁の上に只一となり二となり線となり字
 となつて生きんと願つた。壁の上に残る横縦の疵きずは生を
 欲する執しゅ着じやくの魂魄こんぱくである。余が想像の糸をここまでた
 ぐつて来た時、室内の冷氣が一度に脊の毛穴から身の内

に吹き込む様な感じがして覚えずぞつとした。そう思つて見ると何だか壁が湿っぽい。指先で撫でてみるとぬらりと露にすべる。指先を見ると真赤だ。壁の隅からぼたりぼたりと露の珠が垂れる。床の上を見るとその滴りの痕が鮮やかな紅いの紋を不規則に連ねる。十六世紀の血がにじみ出したと思う。壁の奥の方から唸り声さえ聞える。唸り声が段々と近くなるとそれが夜を洩るる凄^{すご}い歌と変化する。ここは地面の下に通ずる穴倉でその内には人が二人居る。鬼の国から吹き上げる風が石の壁の破れ目を通つて小やかなカンテラを煽^{あお}るから只さえ暗い

室の天井も四隅も煤色すすの油煙で渦巻まいて動いている様に見える。幽かすかに聞えた歌の音は窖中こうちゆうに居る一人の声に相違ない。歌の主は腕を高くまくって、大きな斧を轆轤ろくろの砥石といしにかけて一生懸命に磨いでいる。その傍そばには一挺ちようの斧が抛なげ出してあるが、風の具合でその白い刃がぴかりぴかりと光る事がある。他の一人は腕組をしたまま立って砥との転まわるのを見ている。髯ひげの中から顔が出ていてその半面をカンテラが照す。照された部分が泥だらけの人参にんじんの様な色に見える。「こう毎日の様に舟から送って来ては、首斬り役も繁昌はんじようだのう」と髯ひげがいう。「そう

さ、斧を磨ぐだけでも骨が折れるわ」と歌の主が答える。
これは脊の低い眼の凹くぼんだ煤色の男である。「昨日きのうは美
しいのをやったなあ」と髯が惜しそうにいう。「いや顔
は美しいが頸くびの骨は馬鹿に堅い女だった。御蔭でこの通
り刃が一分ばかりかけた」とやけに轆轤を転ばす、シユ
シユシユと鳴る間から火花がピチピチと出る。磨ぎ手は
声を張り揚げて歌い出す。

切れぬ筈はずだよ女の頸は恋の恨みで刃が折れる。
シユシユシユと鳴る音の外には聴えるものもない。カン
テラの光りが風に煽あおられて磨ぎ手の右の頬ほおを射る。煤の

上に朱を流した様だ。「あすは誰の番かな」と稍^{やや}ありて髯が質問する。「あすは例の婆^{ばあさま}様の番さ」と平気に答える。

生える白髪^{しらが}を浮気が染める、首を斬られりや血が染める。

と高調子に歌う。シユシユシユと轆轤が回わる、ピチピチと火花が出る。「アハハハもう善かろう」と斧を振り翳^{かざ}して灯影^{ほかげ}に刃を見る。「婆様ぎりか、外に誰も居ないか」と髯が又問をかける。「それから例のがやられる」「氣の毒な、もうやるか、可愛相にのう」といえば、「氣の

毒じやが仕方がないわ」と真黒な天井を見て嘯く。うそぶ

たちま 忽ちあな 窖も首斬りもカンテラも一度に消えて余はボー

シヤン塔の真中に茫然ぼうぜんと佇たたずんでいる。ふと気が付いて

見ると傍そばに先刻さつき鴉からすに麵麩パンをやりたいと云った男の子が

立っている。例の怪しい女ももとの如くついている。男

の子が壁を見て「あすここに犬がかいてある」と驚いた様

に云う。女は例の如く過去の権化ごんげと云うべき程のきつと

した口調で「犬ではありません。左りが熊、右が獅子ししで

これはダッドレー家の紋章です」と答える。実のところ

余も犬か豚だと思っていたのであるから、今この女の説

明を聞いて益ますます不思議な女だと思う。そう云えば今ダツドレーと云つたときその言葉の内に何となく力が籠こもつて、あたかも己おのれの家名でも名乗つた如くに感ぜらるる。余は息を凝らして両人ふたりを注視する。女は猶説明をつづける。「この紋章を刻んだ人はジョン・ダツドレーです」あたかもジョンは自分の兄弟の如き語調である。「ジョンには四人の兄弟があつて、その兄弟が、熊と獅子の周圀まわりに刻み付けられてある草花でちゃんと分ります」見ると成程四通りよとおの花だか葉だかが油絵の枠わくの様に熊と獅子を取り巻いて彫つてある。「ここにゐるのは Acorns だこ

れは Ambrose の事です。こちらにあるのが Rose で
 Robert を代表するのです。下の方に忍冬にんどうが描かいてあり
 ましょう。忍冬は Honeysuckle だから Henry に当るの
 です。左りの上に塊かたまりているのが Geranium でこれは G
 ……」と云ったぎり黙もくっている。見ると珊瑚さんごの様な唇が
 電気でも懸かけたかと思おもわれるまでにぶるぶると顫ふるえてい
 る。蝮まむしが鼠ねずみに向むかったときの舌の先の如ごとくだ。しばらく
 すると女はこの紋章の下に書き付けてある題辞を朗朗らか
 に誦じゆした。

Yow that the beasts do wel behold and se,

May deme with ease wherefore here made they be
 With the borders wherein

4 brothers' names who list to serche the grownd.

女はこの句を生れてから今日まで毎日日課として諳誦あんしやうした様に一種の口調を以て誦おわ了わった。実を云うと壁にある字は甚はなはだ見悪いにく。余の如きものは首を捻ひねつても一字も読よめそうにない。余は益この女を怪しく思う。

気味が悪くなつたから通り過ぎて先へ抜ける。銃眼のある角を出ると滅茶苦茶に書き綴つづられた、模様だか文字だか分らない中に、正しき画で、小く「ジェーン」と書

いてある。余は覚えずその前に立留まった。英国の歴史
 を読んだものでジェーン・グレーの名を知らぬ者はある
 まい。又その薄命と無残の最後に同情の涙を濺そそがぬ者は
 あるまい。ジェーンは義父と所天おっとの野心の為に十八年
 の春秋を罪なくして惜気もなく刑場に売った。蹂ふみ躪にじら
 れたる薔薇ばらの薬しゅべより消え難き香かの遠く立ちて、今に至る
 まで史を繙ひもとく者をゆかしがらせる。希臘語を解しプレ
 ートーを読んで一代の碩学せきがくアスカムをして舌を捲かしめ
 たる逸事なんびとは、この詩趣ある人物を想見するの好材料とし
 て何人の脳裏にも保存せらるるであろう。余はジェーン

の名の前に立留ったぎり動かない。動かないと云うより寧ろ動けない。空想の幕は既にあいている。

始は両方の眼が霞んで物が見えなくなる。やがて暗い中の一点にパツと火が点ぜられる。その火が次第次第に大きくなって内に人が動いている様な心持ちがする。次にそれが漸々明るくなって丁度双眼鏡の度を合せる様に判然と眼に映じて来る。次にその景色が段々大きくなって遠方から近づいて来る。気がついて見ると真中に若い女が坐っている、右の端には男が立っている様だ。両方共どこかで見た様だなと考えるうち、瞬たく間にズツと

近づいて余から五六間先で果^{はた}と停^{とま}る。男は前に穴倉^{うち}の裏
 で歌をうたっていた、眼^{くぼ}の凹^{くぼ}んだ煤色をした、脊^{せき}の低い
 奴だ。磨^こぎすました斧^{きね}を左手^{ゆんで}に突^ついて腰^{こし}に八寸程の短刀
 をぶら下げて見構^{みかま}えて立^たっている。余は覺^{おぼ}えずギョツと
 する。女は白^{しろ}き手巾^{ハンケチ}で目^め隠^{かく}しをして両^{りやう}の手^てで首^{くび}を載^のせる
 台^{たい}を探^{たず}す様な風情^{ふぜい}に見^みえる。首^{くび}を載^のせる台^{たい}は日本^{にっぽん}の薪割^{まきわり}
 台^{たい}位の大き^{おほ}きさで前^{まへ}に鉄^{てつ}の環^{かん}が着^きいている。台^{たい}の前部^{まへぶ}に藁^{わら}
 が散^ちらしてあるのは流^{なが}れる血^ちを防^まぐ要慎^{ようじん}と見^みえた。背後^{せきご}
 の壁^{かべ}にもたれて二三人^{にさんにん}の女^{おんな}が泣^なき崩^{くず}れている、侍女^{しじよ}で
 もあろうか。白^{しろ}い毛裏^{けうり}を折^まり返^{かへ}した法衣^{ほふえ}を裾^{すそ}長^{なが}く引^ひく坊^{ぼう}

さんが、うつ向いて女の手を台の方角へ導いてやる。女は雪の如く白い服を着けて、肩にあまる金色の髪を時々雲の様に揺らす。ふとその顔を見ると驚いた。眼こそ見えね、眉の形、細き面おもて、なよやかなる頸の辺りに至いたるまで、先刻さつき見た女そのままである。思わず馳かけ寄ろうとしたが足が縮んで一歩も前へ出る事が出来ぬ。女は漸ようやく首斬り台を探り当てて両の手をかける。唇がむずむずと動く。最前男の子にダツドレーの紋章を説明した時と寸分違たがわぬ。やがて首を少し傾けて「わが夫ギルドフォード・ダツドレーは既に神の国に行つてか」と聞く。肩を

揺り越した一握りの髪が軽くうねりを打つ。坊さんは「知り申さぬ」と答えて「まだ真との道に入りたもう心はなきか」と問う。女きつとして「まこととは吾と吾夫の信ずる道をこそ言え。御身達の道は迷いの道、誤りの道よ」と返す。坊さんは何にも言わずにいる。女は稍落ち付いた調子で「吾夫が先なら追付う、後ならば誘うて行こう。正しき神の国に、正しき道を踏んで行こう」と云い終つて落つるが如く首を台の上に投げかける。眼の凹んだ、煤色の、脊の低い首斬り役が重た気に斧をエイと取り直す。余の洋袴の膝に二三点の血が迸しると思つたら、

凡ての光景が忽然こつぜんと消え失うせた。

あたりを見廻わすと男の子を連れた女はどこへ行つたか影さえ見えない。狐きつねに化かされた様な顔をして茫然と塔を出る。帰り道に又鐘塔しゆとうの下を通つたら高い窓からガイフォークスが稲妻の様な顔を一寸出した。「今一時間早かったら……。この三本のマッチが役に立たなかつたのは実に残念である」と云う声さえ聞えた。自分ながら少々気が変だと思つてそこそこに塔を出る。塔橋を渡つて後ろを顧みたら、北の国の例かこの日もいつの間にかやら雨となつていた。糠粒ぬかつぶを針の目からこぼす様な細か

いのが満都の紅塵こうじんと煤煙ばいえんを溶かして濛々もうもうと天地を鎖す裏うちに地獄の影の様にぬつと見上げられたのは倫敦塔であつた。

無我夢中に宿に着いて、主人に今日は塔を見物して来たと話したら、主人が鴉が五羽居たでしようと言う。おやこの主人もあの女の親類かなと内心おおい大に驚ろくと主人は笑いながら「あれは奉納の鴉です。昔しからあすこに飼っているのです、一羽でも数が不足すると、すぐあとをこしらえます、それだからあの鴉はいつでも五羽に限いっばんっています」と手もなく説明するので、余の空想の

は倫敦塔を見たその日のうちに打ち壊ぶわされてしまつた。余は又主人に壁の題辭の事を話すと、主人は無造作に「ええあの落書ですか、つまらない事をしたもんで、折角奇麗な所を台なしにしてしまいましたねえ、なに罪人の落書だなんて当あてになつたもんじゃありません、贗にせも大分だいぶんありまさあね」と澄ましたものである。余は最後に美しい婦人に逢つた事とその婦人が我々の知らない事や到底読めない字句をすらすら読んだ事などを不思議そうに話し出すと、主人は大おおに軽蔑けいべつした口調で「そりや当り前でさあ、皆んなあすこへ行く時にや案内記を読んで

出掛るんでさあ、その位の事を知ってたって何も驚くにやあたらないでしよう、何すこぶ頗る別べっぴん嬪だつて？ —— 倫敦にや大分別嬪が居ますよ、少し気を付けないと陰けんのん吞ですぜ」と飛んだ所へ火の手が揚あがる。これで余の空想の後半が又打ち壊わされた。主人は二十世紀の倫敦人である。それから人は人と倫敦塔の話しをしない事に極めた。又再び見物に行かない事に極めた。

この篇は事実らしく書き流してあるが、実のところ過半想像的もんじの文字であるから、見る人はその心で読まれんことを希望する、塔の歴史に関して時々戯曲的に面白そうな事

柄を撰えらんで綴つづり込んでみたが、甘うまく行かんで所々不自然の痕こんせき迹が見えるのは已やむを得ない。その中エリザベス（エドワード四世の妃ひ）が幽閉中の二王子に逢いに來る場と、二王子を殺した刺客せつかくの述懐の場は沙翁さおうの歴史劇リチャード三世のうちにもある。沙翁はクラレンス公爵の塔中で殺さるる場を写すには正筆を用い、王子を絞殺する模様をあらわすには仄筆そくひつを使って、刺客の語を藉かり裏面からその様子を描出している。嘗かつてこの劇を読んだとき、其所そこを大に面白く感じた事があるから、今その趣向をそのまま用いてみた。然し対話の内容周囲の光景等は無論余の空想から捏ねっしゅつ出し

たもので沙翁とは何等の関係もない。それから断頭吏の歌をうたって斧を磨ぐ所に就ついて一言いちげんして置くが、この趣向は全くエーンズウォースの「倫敦塔」と云う小説から来たもので、余はこれに対して些さしやう少の創意をも要求する権利はない。エーンズウォースには斧の刃のこぼれたのをソルスベリ伯爵夫人を斬る時の出来事の様ように叙してある。余がこの書を読んだとき断頭場に用うる斧の刃のこぼれたのを首斬り役が磨いでいる景色などは僅わずに一二頁ページに足らぬところではあるが非常に面白いと感じた。のみならず磨ぎながら乱暴な歌を平気でうたっていると云う事が、同じく十五

六分の所作ではあるが、全篇を活動せしむるに足る程の戯曲的出来事だと深く興味を覚えたので、今その趣向そのままを踏とうしゆう襲しゆうしたのである。但し歌の意味も文句も、二吏の対話も、暗あんこう窖こうの光景も一切趣向以外の事は余の空想から成ったものである。序ついででだからエーンズウォースが獄門役に歌わせた歌を紹介して置く。

The axe was sharp, and heavy as lead,

As it touched the neck, off went the head !

Whir-Whir-Whir-Whir !

Queen Anne laid her White throat upon the
block,

Quietly waiting the fatal shock ;

The axe it severed it right in twain,

And so quick-so true-that she felt no pain.

Whir-Whir-Whir-Whir !

Salisbury's countess, she would not die

As a proud dame should-decorously.

Lifting my axe, I split her skull.

And the edge since then has been notched and

dull.

Whir-Whir-Whir-Whir !

Queen Catherine Howard gave me a fee,-

A chain of gold-to die easily :

And her costly present she did not rue,

For I touched her head, and away it flew!

Whir-Whir-Whir-Whir !

この全章を訳そうと思ったが到底思う様に行かないし、
かつ余り長過ぎる恐れがあるから已めにした。

二王子幽閉の場と、ジェーン所刑の場に就ては有名なる
 ドラロツシの絵画がすくな尠からず余の想像を助けている事を
 一言して聊いさやうか感謝の意を表する。

舟より上る囚人のうちワイアットとあるは有名なる詩人
 の子にてジェーンのため兵を挙げたる人、父子同ふじどうみよう名なる
 故ゆえ紛れ易やすいから記しるして置く。

塔中四辺の風致景物を今少し精細に写す方が読者に塔そ
 の物を紹介してその地を踏ましむる思いを自然に引き起さ
 せる上に於て必要な条件とは気が付いているが、何分かか
 る文を草する目的で遊覧した訳ではないし、かつ年ねんげつ月が経

過しているから判然たる景色がどうしても眼の前にあらわれ悪い。従って動ともすると主観的の句が重複して、ある時は読者に不愉快な感じを与えはせぬかと思うところもあるが右の次第だから仕方がない。(三十七年十二月二十日)

日本文学電子図書館

倫敦塔・幻影の盾

著 者：夏目漱石

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館